



(撮影 村上宗一郎)

グラビア・インタビュー①

東京メディカルスクール代表

おかだ ゆういちろう  
**岡田 優一郎**

# 増え続ける留年生・国試浪人生 のために一念発起。 塾を開校し、受講生と共に歩む

## 学生の心に情熱の炎を灯し、導く「勉学の救世主」

子どもの頃、重症のチック症を患い、成績も悪く、いじめられっ子だったという岡田優一郎さん。病気やいじめと闘いながら学校も塾も無遅刻無欠席で通い、学校長の特別推薦で高校・大学へ進学。日本大学松戸歯学部卒業時には学部長賞を授与されるほど優等生になっていました。医歯薬獣医向けの塾の経営者となった現在は、留年や国家試験浪人の学生を対象に熱血指導。たちまち医療系の教育界で一目置かれる存在に躍り出た岡田塾長にお話を伺いました。

## 自分の経験を教育の場で還元したい

—現在のお仕事とその内容を教えていただけますか？

東京メディカルスクールという塾を運営しています。当スクールは、医学部・歯学部・薬学部それに獣医学部の学生を対象に、定期試験や国家試験、卒業試験対策におけるマンツーマン指導を行っています。私自身も経営管理のほか、歯科の講師をしています。はじめは関東の医歯薬系の大学の学生が中心でしたが、今では全国から受講にいらっしゃいます。

—なかには2年待ちの学生さんもいるとか？

はい。とても心苦しいのですが、すべてマンツーマンで徹底的に丁寧に授業を行っているので、お待ちいただくことになってしまいます。当校の特徴として、その学生さんの学力のレベルだけでなく、個人の性格や性質と向き合い、精神的なサポートを心がけていますので、どうしても一人にかかる時間が長くなってしまいます。

—率直にお聞きしますが、大学の授業についていけない、進級できない留年生がそれだけたくさんいるということですね？

そうですね。これは何も頭が悪いということではなく、皆さん小学生の頃から塾に通っているのに、いつも「与えられる側」なんです。自分で課題を決めて自主的に勉強に取り組む経験が薄いままに大学生になってしまう。大学に入って初めて「自習」が求められるのですが、どうしていいかわからない人が増えているという印象です。また、医者を目指す人は小学生の頃からそれに合った塾通いをしているため、目標の大学の受験対策ができていない。そうすると、高校生の時までは

それでもよくても、いざ大学生になった時、バランスの悪い学力しか育っていないという傾向も見られます。

—岡田さん自身も塾通いをされていたんですか？

中学1年から高校3年まではほぼ毎日のように通っていました。そのせいか、大学に入ったら今度は教える立場になりたいと思うようになりました。それで歯学部の学生になってから、予備校の講師の面接を受けに行きました。アルバイトですが、なかなか採用されませんでした。人前で話すのが苦手だったんです。それでも諦めきれずに、当時は主流ではなかった個別指導の講師の面接に出向き、採用されました。最初はまったく人気がなく、指導法に関する本などを読んで悩み、考える日々が続きました。その頃から「教育」そのものに強い関心がありましたね。面白いことに、ある日を境に急に人気が出始め、大手の予備校に移って、その「顔」となっていました。

私の中でだんだん歯科医師になるよりも、「歯科医師になりたい人の手伝いをしたい」という気持ちが膨らんでいきました。中・高と2度、学校長特別推薦をいただいたことや、大学に入ってから知った「学び」の喜



▲秋葉原（東京都）と綾瀬（千葉県）にある東京メディカルスクールの教室



(撮影 村上宗一郎)

び、恩師との出会いを通して、そういう感謝の念をお返しするには、自分の経験を生徒や学生に還元していくことが最善のように思えたのです。

## 成績不振といじめで辛かった子ども時代

——学校長特別推薦の話が出ましたが、高校・大学とも日本大学の系列ですね。

そのご質問に答えるために、私自身の子どもの頃からの話をさせてください。

私は幼い頃からとにかくおとなしくて目立たない子どもでした。重症のチック症だったのと、そのせいでいじめられていたからです。風邪をひいていないのに咳込んだり、自分の意思とは関係なく勝手に声が出てしまったり、パチパチ瞬きしてしまうといった症状が止まらないのです。そのせいか、勉強にまったく集中できず、成績は、ひどい時は2が並びました。中学1年生から週5日は塾に通うなど、勉強はしていたのですが、塾では常に一番下のクラスでした。

いじめは高校を卒業するまでありました。毎日捕まえられて殴られたり、下級生や知らない人にも羽交い締めにされて肋骨を折られたり。今でも痕が残っていますが、ホチキスで首の後ろを20本くらい刺されたこともあります。ですから、いじめられっ子や勉強ができない子の気持ちはよくわかります。

——大変な思いをされてきたんですね。そのような苦しい体験を、どうやって乗り越えられたのですか。

中学生の頃、通っている医者から二つの選択肢を示されたんです。一つは薬を処方する——症状が治まってラクになるけれど、将来、車の運転ができないなど様々な障害が出るかもしれない。もう一つは、薬は処方しない——症状は続いて、いじめも続くだろうが、歳をとれば軽減して治る可能性がある。私は即答で後者を選びました。いつかは治るかもしれないという希望に懸けたのです。それに、もともと根がポジティブだったので、どんなにいじめられても学校を休むという考えはよぎりませんでした。いつか乗

り越えてみせる、という自信のようなものがありました。

——成績の話に戻りますが、2の評価が並ぶ生徒が学校長推薦をもらうとは考えにくいのですが。

中学時代、毎日塾に通っているのに成績が悪かったので、こんなにやってもダメなのだから高校への進学を諦めようと思いました。中学を卒業したら専門学校に入るか、料理人になるために就職しようと考えたほどです。

挫折感に苛まれていた時、父が当時普及しかけていたワープロを買ってくれました。すぐに使いこなせるようになり、「これを使ってみんなに問題集や資料集のプリントを作ろう」と思いつきました。それから毎日プリントを作成して学校に持っていくと、先生方が私のプリントをクラスのみんに配ってくれたんです。実は、自分ではそのプリントの問題を解けなかったのですが(笑)。

また、担任の先生が、私に学級委員に立候補するように薦めてくれたことがありました。数票しか入らず、大敗でしたが、いじめられていたにもかかわらず票を入れてくれる人がいた事実は、私を感動させました。この二つの経験が「人のために何かすると嬉しい」「挑戦すると誇りを感じる」という行動規範の原点になっているような気がします。

無遅刻・無早退・無欠席を貫いた私の姿を、先生方が認めてくださったのでしょうか。学校長による特別推薦をいただき、日本大学第一高等学校へ進学することができました。

## 日大松戸歯学部への入学を熱望

——高校時代に歯学部への進学を考えるようになったのですか。

特別推薦で高校に入学させていただいたか

らにはしっかり勉強しようと、塾をさらに増やして週6日通うようになりました。それでも成績が伸びず、毎朝一番に学校に行って勉強しました。そんな時、またもや手を差し伸べてくださる先生が現れ、放課後に勉強を教えてくださいました。でもやっぱり成績は下から数えたほうが早かったですね。父母からは「好きなことをとことんやったほうが一流になれるよ」と言われました。

塾通いの一方で、考古学や人体・生命の不思議、骨格や化石などに興味があり、博物館によく足を運んでいました。日本大学松戸歯学部の組織学教室教授・小澤重幸先生が、「エナメル質の歯の研究」というテーマで恐竜や人体を含めた生物の研究をされているのを知り、「これだ！楽しい！勉強したい！」と突き動かされたのです。それで自分でアポイントをとって、大学の学園祭や体験授業に行き、松戸歯学部への出願を決めました。

運も作用したのかもしれませんが、いじめはまだ続いていましたが、自宅から高校まで往



▲解剖学の勉強にのめりこんだ学生時代。日本解剖学学会で発表する岡田代表

復4時間かけて、3年間、無遅刻・無早退・無欠席を貫きました。幸運にも松戸歯学部を学校長特別推薦枠で受験することができ、自分より成績がいい生徒が軒並み不合格だったなか、合格しました。大学入学後は迷わず小澤先生の研究室に入れていただき（当時は2年生から研究室に入ることができた）、夢が叶いました。

——大学でも熱心に勉強されて、学部長賞を授与されたそうですね。

すべてが新しい科目の授業になるので、苦手意識もなく、新たな気持ちでスタートすることができました。それまではいい成績を取りたくて勉強していたのが、勉強することそのものが好きになりました。チック症の症状も徐々に軽減し、心配したいじめもなく、ソフトテニス部のサークルに所属してサークル活動を楽しんだりしました。

学部長賞というのは、各大学にあると思いますが、大学6年間の学業に加え、スポーツ、ボランティア等の活動においてトータルで評価して与えられる賞です。例えば、スポーツの大きな大会で優勝して記録を塗り替えた場合なども授与されます。

私の場合、学業はいい成績を取っていましたが、ほかはほとんど偶然です。ソフトテニ

ス部に在籍していた時に全日本歯科大学大会を開催する会場を探したり、学園祭の実行委員を2年務めたことなどが評価されたようです。とても嬉しく誇らしく、中学校と高校時代の恩師に報告しました。先生方も大変喜んでくださいました。

### 恩返しのためにも塾で学生を導き、救いたい

——卒業後の進路についてお聞かせください。

歯科医師国家試験に合格して、歯科医師臨床研修後、家庭の諸事情により臨床医への道には進みませんでした。大手の国家試験対策専門の予備校への就職を考えましたが、当時は1人の講師が1～2科目を担当するのが通例でした。しかし私は歯学教育全般に興味があり、そういう予備校の体制では物足りないと感じていました。現在、歯科医師国家試験は20を超える科目の試験があります。1人で学生に全科目を教えることが私の思い描く講師像だったのです。そこに私の情熱を注ごうと思うようになりました。

——それで自分で塾を開こうと思われた？

はい。大学1～6年生や国家試験の浪人生を対象に、全科目に対応したマンツーマン指導スクールを作りたいと思いました。



▲日本大学松戸歯学部の卒業式にて。このとき学部長賞を授与された



▲岡田代表が編集発行した歯科医師試験対策テキスト「歯科ナビ」。歯科大学でも使われている

——大学内の授業だけでは追いつかないということですか？

もちろん優秀な学生は塾など必要ないでしょう。しかし現実には、医歯薬関係の学部の進級に苦勞する学生は少なくありません。また、国家試験も難関化して、入学時の上位1～3割程度の学生のみが留年せずに卒業できるという大学も多数あります。大学や学部の国家試験合格率を表すのに、卒業生の数を分母とした合格率を公表している資料がありますが、これにはトリックがあります。つまり国家試験に不合格だった学生の場合、留年する人も多いので、出願者数を分母とした合格者の割合を見なければ正確な実態は把握できません（表参照）。

出願者数に対する合格率の推移

	平成27年 (第108回)	平成28年 (第109回)	平成29年 (第110回)
東京歯科大学	83.8%	81.6%	79.3%
昭和大学	79.2%	77.0%	77.6%
日本大学松戸歯学部	56.0%	39.4%	63.7%
愛知学院大学	63.6%	59.4%	59.5%
日本大学	54.5%	65.4%	57.3%
大阪歯科大学	54.5%	53.8%	55.2%
北海道医療大学	41.6%	30.9%	52.4%
松本歯科大学	18.8%	37.0%	50.6%
日本歯科大学	56.1%	62.3%	50.3%
岩手医科大学	36.1%	31.3%	46.2%
日本歯科大学新潟	53.2%	59.3%	43.8%
明海大学	37.1%	30.3%	39.4%
神奈川歯科大学	43.4%	43.3%	38.7%
奥羽大学	25.5%	29.6%	38.6%
朝日大学	41.1%	34.8%	35.2%
福岡歯科大学	52.0%	38.0%	31.7%

厚生労働省発表「歯科医師国家試験の学校別合格者状況」（第108回～第110回）より各大学の新卒者の合格者数を出願者数で割ったもの

——塾に通う学生を見て、近年の傾向などはありますか？

厳しい学生生活を過ごすうち、半ば燃え尽きて「卒業できなくてもいい」という諦めが一部の学生を襲うことがあります。また医学部の特徴として、低学年での留年の増加が挙げられます。これは幼少期から、家庭教師や

予備校などの講師に「〇〇大学医学部と△△医科大学に入るためには、これを勉強しましょう」と言われ続けて育ち、そのみの受験勉強に明け暮れた影響ではないでしょうか。先ほども言いましたが、いざ念願の大学に入ってみると、人生で初めて“指示してくれる先生がいない”事態に陥り、途方に暮れる学生が増えているのだと思います。そのような人たちが、大学2年時の専門科目で10科目以上不合格となり、留年や放校となる例も年々増加しています。

——そういう学生が岡田さんの学校の門を叩くのですか？

当校がなぜ人気があるかと言うと、私自身が物覚えの悪い生徒だったために、そこから出発して授業を組み立てているからです。自分がずっと塾に通い、コツコツ勉強してきたので、当校の学習内容のすべてにおいて「なぜそうなるのか」を一から教えるようにしています。幸い、学生時代の6年間、私は解剖学の研究室で湧き出る疑問を片っ端から探り、答えを見つけ、知識を積み重ねてきました。この蓄積が、現在の私の教育者としての土台になっています。

すべての試験科目をこのように基礎の基礎から教えると、学生は忘れないだけでなく、知識としての興味が広がるために勉強の意欲も湧くようです。実際に、留年した学生が当校入学後あっという間に学部で上位になり、そのまま卒業というケースも珍しくありません。

### 未来の医師の心に情熱の炎を灯す

——学校経営で苦心している点はありますか？

二つ、あります。一つが講師の育成です。当校には講師として医師・歯科医師・薬剤



(撮影 村上宗一郎)

師・獣医師をはじめ様々な医療職が在籍しています。医歯薬系の大学などからご紹介いただき、講師を採用していますが、その教えかたの質の向上に気を配っています。私も歯科の講師ですが、講師たちが切磋琢磨して良質な授業が提供できるよう、ひき続き努力してまいります。

二つ目は、学生の目的意識の向上に尽力しています。

私はよく「エベレスト登頂」の話をします。講師はベテラン登山ガイド、学生は登山の入門者。登山ガイドがいくら上からロープで引っ張っても、学生本人に山頂を極める意志＝国家試験取得への意欲がなければ、頂上にたどり着きません。当校の授業を受けることで、医学全般に対する興味が湧き、楽しく勉強して、成績が上がり、卒業する——そこまで一人一人を導いていくことが当校の使命

だと思っています。

医者になる人には素直さと情熱が必要です。真の勉強に触れる機会を得ると、心に情熱の炎が灯ります。私どもの行う授業によって、そのお手伝いができればと思います。

——出版事業も展開されていますね。

はい。私のような若造がいきなり出版社に電話をしても誰も取り合ってくれず、自分で出版社を立ち上げることにしました。関東のすべての歯学部全学年の学生を教えた経験から、どこの大学は何を教えていて何を教えていないかを把握していますので、過去20年分の出題データを分析・集約した『歯科ナビ』を執筆、発行しました。この『歯科ナビ』を教科書として採用する歯学部もあるほど、好評をいただいています。

昨年は、これまで過去問題集が発行されていなかった『66回 獣医師国家試験 過去問題集』を全国で初めて出版しました。

——最後に、学生へのメッセージをお願いします。

大学は「大いに学ぶ」と書きます。医学・歯学・薬学・獣医学を大いに学び、「知の喜び」を知ってほしい。同時に、医歯薬獣医系の大学は、勉強したことが将来、国民に還元されるという大きな意味を持っています。その自覚を大切に、社会性を身につけ、魅力的な人間になってほしいですね。

(取材・執筆 石井 悦子)

#### Profile 岡田優一郎 (おかだ・ゆういちろう)

1984年千葉県生まれ。公立中学校を卒業後、日本大学第一高等学校入学。卒業後、日本大学松戸歯学部入学。2009年同大学卒業後、歯科医師臨床研修を経て、塾の講師等しながら歯学部教材制作などを行う。2014年4月、東京メディカルスクールを開校。医師、歯科医師、薬剤師、獣医師の他、言語聴覚士、理学療法士、臨床検査技師、看護師など医療系の卒業試験・国家試験対策をメインに指導・運営している。